

中学校における「校内教育支援センター」設置に関する研究

― 「校内教育支援センター」に求められる役割と機能を考える ―

学 籍 番 号	239215
氏 名	藤川 綾美
大学院主指導教員	柿 慶子
大学院副指導教員	水野 治久

1. 本実践研究の背景と目的

近年、学校に行けない(行かない)児童・生徒が年々増加しており、令和5年度の文部科学省の調査では、小・中学校の不登校児童生徒数は346,482人で過去最多である。中学校での全生徒に占める割合は6.7%, 30人以上のクラスでは1クラスに2人の不登校生徒がいる状況である。このような中、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLOプラン)(文部科学省 2023)において、「不登校により学びにアクセスできない子供たちをゼロにすることを目指す」ための学びの場の一つとして、それまでは校内の必要に応じて設置されていた校内適応指導教室は、校内に当たり前に存在するものとして、校内教育支援センター(スペシャルサポートルーム等)という名称で明文化された。そこで今回、実習校における校内教育支援センター設置に向けて、教員の意識を探り、機能と役割、より良い運営方法を探ることを研究の目的とした。

2. 基本学校実習Ⅰ・Ⅱにおける実践

基本学校実習では、図書室を活用して、校内教育支援センターの役割を考えることに焦点をあてながら、不登校の予防につながる支援に取り組むこととした。具体的には生徒が主体的に取り組む委員会活動を計画し、その中で個々を「認める」「認められる」経験を積ませることで自己有用感を育むこと目標とした。また、放課後に図書室開放を行い、元気アップサポーターや支援員と協力して、学習支援をしたり話を聞いたりした。委員会活動では、生徒間の関係が良くなったり、出席が増えたりした生徒も見られた。また、学習支援をしながら、生徒との関係づくりができた。取り組みの成果からは、校内教育支援センターの役割には「居場所としての役割」「自己有用感を育む役割」「学習支援の役割」の3点があると認識できた。

3. 実践課題研究Ⅰ：教員への質問紙調査

実習校の教員対象に、「校内教育支援センター」に求められる役割と機能についての意識を探ることを目的とし、質問紙調査を実施した。結果として、どのような生徒の利用を想定するかという問いに関しては、「週に1回程度」「週に3回程度」登校できている生徒を対象だと考えている回答がある一方、完全に不登校になってしまっている生徒を対象と考えている回答もあった。教育支援センターに登校してきた生徒への教員自身の関わりとしては、生徒への声掛

け・コミュニケーションによる信頼関係構築から、学習支援や進路支援まで様々な想定がなされていた。教員が自らどのように「校内教育支援センター」と連携していくか、という問いに関しては、細やかに情報共有していきたいが、実際の運営の中で試行錯誤しながら考えたいという意見が大半であった。実習校の教員が不登校生徒への支援をどう考えていくのか、連携をどうしていくのか等の共通認識が必要であると考ええる。

4. 実践課題研究Ⅱ 教員へのインタビュー調査

校内教育支援センターの設置にあたって、教員が現在不登校生徒に行っている支援や校内教育支援センターにどのような役割・機能を求めているのかを明らかにするため、実習校の6名の教員にインタビュー調査を行った。その結果、不登校生徒に対して行われている支援やその根底にある考え方、校内教育支援センターを運営する際の支援や連携の方法に望むこと・課題等が見えてきた。教員が生徒や保護者・家庭のニーズを汲み取り、将来に向けてサポートすることを大切にし、変化し続けている現代の不登校生徒に対する様々な支援を行う一方で、現在の支援のあり方に対する葛藤・課題も浮き彫りになった。文部科学省が「不登校児童生徒への支援においては、学校に登校するという結果のみを目標とするのではない」と謳うことを理解しつつも、「教室に入って学級で過ごしてほしい」と思う気持ちからジレンマに陥ったり、不登校に関する専門的な知識が欲しいと思う気持ちも強く持っていたりすることが分かった。しっかりと知識を得て、学び合うことで、校内教育支援センターがよりよく機能すると考える。

5. 総合考察及び提言

実習校の教員に対する質問紙調査とインタビュー調査の結果を分析する中で、教員の不登校支援の意識に関して様々なことが明らかになった。教員は日々、生徒のために時間の許す限り精一杯支援に取り組んでいるが、その支援が正しいかどうか迷いもあるということ、校内教育支援センターに関して、「どのような場所であるか分からないから」「どのような人材が教育支援センターに配置されるか分からないから」との理由で不安を感じている場合もあるということである。見えてきた不登校支援、校内教育支援センターへの想いから、校内支援センターの設置に向けて、4つを提言としたい。1点目は、校内教育支援センター運営のための校内委員会を立ち上げである。各学年に連携役の教員を配置し、定期的な会議で情報共有を行い、自由に発言できる空間を保証する。2点目はどのような不登校生徒・不登校傾向の生徒に校内教育支援センターへの入室を提案していくかの基準を作ることである。これには、教員の合意形成と生徒・保護者への周知が必要である。3点目は支援員にどのような役割を求めるかであるが、生徒がその場所でどのように過ごすのかとも関係するため、常に情報共有をしながら、綿密かつ柔軟な協力体制が不可欠である。4点目として、教員は不登校生徒の支援に関して、時代に応じた支援や専門的な知識を望んでいるため、不登校支援について校内研修を行うことである。

筆者は様々な背景を抱えた生徒全員がどんな形であれ、自分に価値を感じ、幸せに生きてほしいと願っている。教室がしんどい生徒も自分の目標を立て、スモールステップで自分なりの目標に到達し、それを繰り返し、なりたい自分に少しずつ近づくことで、自分に自信を持ち、社会に繋がってほしい。校内教育支援センターが上手に機能すれば、生徒の自己実現のその一端を担うことができるはずである。